

いのか分かりません。」

「これは荒れるぞ」と私は思いました。だってこの全同研大会も49回目。49年もたつて「何も行わず、言わず、黙^{だま}って耐^たえていれば差別はなくなる」「部落出身であることを教えない」という「寝^ねた子^こを起^おこすな」思想^{しそう}を信^{しん}じて堂々^{どうどう}と語^{かた}ってしまう教師^{きょうし}がいるんですから。黙^{だま}ってれば差別がなくなるんだったら、解放^{かいほう}令^{れい}(制度的な差別がなくなった時)から126年^す過ぎた今、なぜ多くの人々が差別により苦しめられているんでしょう。私は自分の言いたいことを整理^{せいり}しながら、会場^{かいこう}のみんながどんな反^{はん}応^{おう}をするのか待ちました。しばらくして会場^{かいこう}の右^{みぎ}手^てと左^{ひだり}手^て側^{がわ}から手^てが上^あがりました。右^{みぎ}手^て側^{がわ}の人は森口先生^{もりぐちせんせい}で、その発言^{はつげん}の後^{のち}、左^{ひだり}手^て側^{がわ}の人がマイクを手^てにしました。

「第1回目から49回目を数えたこの全同研で、まさか『寝^ねた子^こを起^おこすな』を主^{しゅ}張^{ちやう}する方がいるとは思^{おも}いもよりませんでした。……」

怒^{いか}りを抑^{おさ}えながら、しかしその声^{こゑ}に深^いい憤^{いきどお}りを感じさせる発言^{はつげん}でした。私はこの怒^{いか}りにつなげながら、東京^{とうきょう}の先生^{せんせい}を大切^{かた}にして語^{かた}りかけなければいけないと思^{おも}い、拳^{きよしめ}手をしました。ほかの板野中学校^{いたのちゅうがっこう}の先生^{せんせい}方もみんな手^てをあげていました。……しかし、司会者^{しかいしゃ}はそこで会^{かい}を終^{しま}えてしまいました。せっかく盛^もり上^あがろうとしているところで無^む神^{しん}経^{けい}にも終わってしまったのです。大人^{おとな}数^{かず}が会場^{かいこう}に入^いっていましたから、解^{かい}散^{さん}した後はその東京^{とうきょう}の方^{かた}を探^{さが}すこともできませんでした。私^{わたし}が最^{さい}後^ごに言^いいたかったのはこうです。

「『寝^ねた子^こを起^おこすな』のやり方も部^ぶ落^{らく}差^さ別^{べつ}をなくす一つの方法^{はうほう}かもしれません。部^ぶ落^{らく}内^{うち}外^{がい}の結^{けっ}婚^{こん}が多^{おほ}くなり、どこが『部^ぶ落^{らく}』なのか分^わかからないようになれば差^さ別^{べつ}する対^{たい}象^{しやう}が見^みえなくなるのだから。しかしそこまでたどり着^つくの^{いっさい}に一^{いっ}体^{たい}ど^れだ^けの^{いっ}人^{ひと}々^々が差^さ別^{べつ}の犠^ぎ牲^{せい}となっていくのでしょうか。この『寝^ねた子^こを起^おこすな』のやり方^{やりかた}には明^あら^かに間^ま違^{ちが}っている点^{てん}が2つあります。

ひとつは、いつ来るか分^わかからない『どこが「部^ぶ落^{らく}」なのか分^わかからなくなる』という状^{じやう}況^{きやう}になるまで、今部^ぶ落^{らく}差^さ別^{べつ}で苦^{くる}しんでいる多^{おほ}くの人^{ひと}々^々が泣^なき寝^ね入^いりしなければならな^いこ^とです。今現^{いま}在^{ざい}差^さ別^{べつ}を受^うけていない人^{ひと}、受^うけたこ^との^{ない}人^{ひと}はいいかもし^れませ^ん。差^さ別^{べつ}を受^うけずに一^{いっ}生^{せい}を終^おえる方^{かた}もい^るで^しょう。だ^けど、部^ぶ落^{らく}の^こども^{たち}が差^さ別^{べつ}を受^うけ^{ない}可^か能^{のう}性^{せい}はあ^っても、差^さ別^{べつ}を受^うけ^{ない}とい^う100%の保^ほ障^{しょう}はま^った^くないで^しょう。

ふたつめ。なぜ部^ぶ落^{らく}があ^ったら^いけ^{ない}の^でし^{ょう}か。部^ぶ落^{らく}の^{しゅ}身^{しん}である^{こと}は何^{なん}か悪^{わる}い^こと^なの^です^か。「こ^こに部^ぶ落^{らく}があ^る」こ^とをい^ちい^ち言^いう^必要^{よう}は^ない^です^が、か^くす^必要^{よう}は^ない^と思^{おも}い^ます。き^びしい^差別^{べつ}を^さけ^るた^めに^{しゅ}身^{しん}を^かく^すとい^うこ^とな^ので^すが、

かくしきれものではないことは様々な差別事件^{さべつじけん}をふりかえればすぐに分かることです。なのに教師が「出身をかくした方がよい。部落はないと指導^{しどう}する方がよい」と考えるのは、教師の心の中に部落に対する悪いイメージがあるからに他なりません。『ばれたらまずい。やばい。かくせ!』という感覚^{かんかく}です。もちろんなんでもかんでもあからさまにしてしまうのは問題^{もんだい}がありますが、基本的^{きほんてき}に『寝た子を起こすな』では部落差別はなくならないという考え方を持っていなければならないのではないのでしょうか。」

まあ2年間板野中学校で勉強^{べんきょう}しているからこそこんな風に思えるわけで、その東京の人でも勉強中^せなのだから責めるつもりはありませんでした(説教^{せつぎょう}では人間なかなか変わらないし)。だけど「寝た子を起こすな」でやっている先生や学校は徳島にもいっぱいあります。高校などはほとんどがそうじゃないのでしょうか。うらを返せばそれだけ差別がきびしいということなのですが。

次の日は愛媛県で「チェリーブラッサム」という高校生友の会(板野^{しんゆうかい}の真友会にあたる)の指導^{なかいけいこ}をしている中井桂子先生の発表があつたので、そこへ参加しました。以前^{いぜん}にもマイスカイでこの先生のことは紹介されたと思うのですが、ほんとにほがらかで屈託^{くつたく}のない人で、楽しんで解放教育(同和教育^{かいほうきょういく})に取り組んでいる方です。この発表も軽^{かる}い感じで「私は同和教育ががんばってます。みなさんもがんばって下さい。がんばらないとダメです。教師失格^{しっかく}です。がんばれ、がんばれ、がんばれ～」という感じではまったくなくて、「こんなに楽しいですよ～。うらやましいでしょ～」てな調子^{ちょうし}でした。この軽さというか、明るさというか、いいかげんそうなんだけど実は熱^{ねつ}があり行動^{こうどう}があるという教師がこれからの解放教育(同和教育^{もと})に求められるのかな、と思いました。

その夜は全国^{ぜんこく}から集まった解放教育(同和教育)が好きな人々がなんと70人も集まって、てんやわんやの交流会^{こうりゅうかい}をしました。愛媛、香川、熊本、兵庫、大阪、岡山、京都、奈良そして徳島と9つの府県^{ふけん}にまたがって解放教育(同和教育)を通してつながっているのです。うらやましいでしょう。ほんとに人のつながりはエネルギー^{あた}を与えてくれます。

今回は5日間を通していろんな方とめぐり合うことが出来ました。特に全同研の帰りにおとずれた福岡県^{く る め し どうわきょうい けんきょうきょうぎかい}は久留米市同和教育研究協議会(久留米市同教^{し どうきょう})ではまたまたおもしろい人たちとめぐり会いました。この久留米は私のふるさととなりの市で非常^{ひじょう}になじみ深いところなのですが、実は解放教育(同和教育)が進んでいる福岡県の中で「同和教育の陥没地帯^{かんぼつ ち}」と言われていたところです。部落^{しやうすうてんざい}が少数点在型^{ひじょう}といって非常に人数が少なく、差別に対して立ち上がろうにも仲間が少なくなかなか行動^{うづ}に移せない状況^{じやうきやう}でした。しかし、今は

日本の伝統芸能

「猿まわし」復活 後編

村崎義正

太郎がジローに寄ろうとした。瞬間、ジローは齒をむき、かまえた。その顔が無惨にむけて、土と血まみれである。太郎が一瞬、あどろりとした。ジローの凄惨な闘志に氣おくれたのである。

「太郎、なぜおびえる。ひつつかまえて、押さえつけ。姉さんがやったようにやるんじや」

と、私は怒鳴りつけた。

太郎は、泣き出しそうな悲痛な表情で、ジローに挑みかかった。ジローはさっと身を引き、腰を引いた。襲いかかる、猿独特の姿勢である。ジローが太郎へ襲いかかる。太郎がジローの腕をつかんだ。もつれた。

「くっそう……くっそう……」

太郎が絶叫する。どちらが勝っているか解らない。

「太郎、お前の声はのどからしか出ちゃらんぞ。腹から出せ。のどからの声は、うわずった声じやから、猿になめられるんじや。腹から声を出せ。そして叩き伏せろ。ここで負けたら、猿じゃない。お前の人生が駄目になるんだ。腹から声を出して、叩き伏せろ」

「うおっ……うおっ……」

太郎は、けたもののようにほうこうした。二つの影はさらに激しくもつれる。私はじいっと見つめていた。

ついに、太郎は、ジローの両耳タブをつかんだ。ジローの背中に馬乗りになる。

「声がない。声はどうした。そのくらのことでくたびれてどうなる」

「こりやあ、解らんか、解らんか」

太郎は絶叫し、渾身の力をふりしぼって、組み伏せた。ジローの顔を、地面に叩きつける。何度も何度も、叩きつける。ジローは、のがれようと必死にもがくが、力がつきた。

「ギャギャギャ、ギャギャギャ」

太郎は、ジローに勝った。力が伯仲したすさまじい闘いだった。ジローは、ふらふらと立ちあがるのがやっとだった。

「ただちに、山ゆきさすり込みにはいる。周囲が暗くなりはじめた。ジローを直立させ、背中から腰に向かつてさすりおろす。手が傷だらけである。ジローに噛まれたのである。ジローの顔は、形がなくなつたと言いたいほどすりむけて、血と土でべつとりである。ジローも太郎も、せいぜい荒息で、やっと呼吸をしている。」

ジローはさすり込まれるたびに、足

をふんばる。みじかい尾が、びつとあがる。腰や足に力がいっている証拠である。

「太郎くんよう頑張ったね。もう、これで大丈夫。やさしゅうに、いたわつちよつたら、猿は、絶対に芸をやるようにならんよ。こうしてゲジ(折檻)をして、ゲジをして、徹底的にゲジをせんにやあ、人間の言うことは聞かんし、一人前の猿にやあなれんよ。」

太郎くんもうちつとで負けよつたらうがね。こもうても、そりやあ力が強いんじやけい。甘い顔は見せられりやせんよ。これ等あの世界でも、ボスになろうと思うたら、命がけで喧嘩をするんじやけいね。なみたいていの力じやあボスになれん。ゲジをして、ゲジをして、太郎くんがボスつちゅうことを、ジローちゃんに教えにや、いけんのよ。それで、はじめで、コンビがうまれるんじやけいね。

ジローちゃんはいえ猿よ。今が一番仕込みやすい年頃(二歳)いね。なんぼうでも芸を覚えるいね」
ふじ子さんは、太郎を、諄々とさす。太郎はうなずきながら、ジローにさすりを入れる。ふじ子さんの顔は、もとの観音様に戻っている。

「ジローちゃんごめんね。あんたをひどい目に逢わせようとは思わんじやつたんよ。太郎くんとおんたに一時も早よう一人前になつてもらいたいばつかりに、ひどい目に逢わせてしもうて、本当にすまんじやつたね。こらえてよ。小母ちゃんは、早よう一人前になつてくれることを願うちよるよ」

吾が子をさとすように、さとす。ふじ子さんの思いが、まぶしいくらいにじみ出ていた。

太郎とジローが峠を越えた。けわしい峠を、人間と猿が一緒に越えた。人も猿も、越えなくては生命を輝かすことのできない、険しい峠を越えた。ぼんやりした、甘えの多い人には、一生に一度も越えることのできない峠である。どんなに辛くても苦しくても、勝負を捨てる訳にはゆかない。九分九厘負けた勝負でも、わずかな可能性が残っていれば、その可能性へ、執念こめてアタックしてゆくことが大切である。猿まわしの復活へ、この一歩は大きかった。その夜、歴史的な転換を祝って、ささやかな祝杯をあげた。

おわり